報道関係者各位

2026年11月2日
読売新聞東京本社
読売巨人軍
よみうりランド

「東京よみうり水族館」来夏開業
TOKYO GIANTS TOWN グランドオープン！

読売新聞東京本社、読売巨人軍、よみうりランドの３社が、東京都稲城市のよみうりランド遊園地に隣接するエリアで共同開発している「ＴＯＫＹＯ　ＧＩＡＮＴＳ　ＴＯＷＮ」（東京ジャイアンツタウン）内で建設中の水族館の名称が「東京よみうり水族館」に決まりました。開業は２０２７年夏です。同時に飲食施設も営業開始予定で、２０２５年３月に先行オープンした「ジャイアンツタウンスタジアム」を中心に、いよいよ東京ジャイアンツタウンがグランドオープンします。

１．「東京よみうり水族館」とは

人工海水を使用する内陸型の本格的な水族館で、地下１階地上３階建て、屋外展示を含む施設面積は９，８７４㎡。３５０種、４万点の展示を予定しています。コンセプトは「生きものの世界を人が訪れ、同じ時間を共に過ごす」。生命の源である水が、地域の象徴である多摩川から海、浅瀬から深い海につながるストーリーを展開します。



建設中の「東京よみうり水族館」。左奥がジャイアンツタウンスタジアム、右奥が飲食施設「Ｇ－ＴＯＷＮ　ＴＡＢＬＥ」（2026年10月28日撮影）

● 生きものたちの世界を巡る

エントランスを入ると、コツメカワウソがお出迎えします。館内は「ペンギン」や「クラゲ」など１０のエリアで構成され、水草の展示水槽としては極めて長い約３０mの「ウォーターガーデン」や、よみうりランド遊園地から移住したアシカたちが、アザラシたちとのんびり暮らす、約３００㎡の広々とした展示エリア「アシカの楽園」など、伸び伸びと生活する生きものたちを間近に見られます。深海・太古エリアでは、１９６７年にフランス政府から寄贈され、日本で初めて公開されたシーラカンスの標本も展示します。

● 海中トンネルでサンゴの海に

たくさんの見どころの中でも特に注目していただきたいのは、サンゴの海をテーマにした大水槽（高さ約７m、幅約１３m、水量約１，３００トン）の中を３６０度見渡しながら歩くことのできる透明な海中トンネルです。大水槽には「ドロップオフ」（浅瀬から急に深くなる場所）を設け、様々な生きものが集まる豊かな海を再現します。海中トンネルの始まりにあるアクリルドームでは、視界いっぱいに海中の景色が広がり、海の中にいるかのような没入感を味わえます。



海の中にいるような没入感を味わえるアクリルドーム（イメージ）

● 「海のゆりかご」未来に

サンゴ礁は多様な生きものを育み、「海のゆりかご」とも呼ばれます。近年、地球温暖化による大規模な白化現象が起き、サンゴ礁の消失が進んでいます。よみうりランドは沖縄県国頭村、国頭漁業協同組合との３者で、サンゴ礁の保全などを目的とした包括連携協定を結んでいます。大水槽に併設する水槽で、同村で養殖されたサンゴを展示し、啓発活動も行います。

２０２６年５～６月には、大水槽に使う巨大アクリル板（高さ約８m、幅約３m、重さ１６トン超）を搬入しました。大型クレーンで空中に吊り上げてから、慎重に建物内に下ろし、数日をかけて移動させて据え付けました。現在の工事の進捗は６割程度で、外観が姿を現し、内装の整備が本格化しています。今後は生きものが健康に暮らせる水の環境を作るため、試験運用で念入りに調整した上で、開業日時を決定します。



巨大アクリル板搬入の様子（2026年５月29日撮影）

２．多摩川でつながる、球場一体型の水族館

東京よみうり水族館は、全国でも例を見ない球場一体型の水族館です。ジャイアンツタウンスタジアムのレフトスタンド後方にあり、スタジアムで有料イベントのないときは自由に行き来できます。

両施設をつなぐキーワードは「多摩川」です。スタジアムは１９５５～１９９８年に読売巨人軍の専用球場だった「多摩川グラウンド」（東京都大田区）をイメージしています。当時の多摩川グラウンドでは、ファンが気軽に未来のスター選手に声を掛けていました。こうした親しみやすさを再現するため、スタジアムでは２、３階のスタンドの座席を４列にとどめ、グラウンドとの距離を近づけています。



コンコースの先が水族館とつながっている（2026年10月28日撮影）

また、スタジアムの２階には、ファンらが散歩しながら選手や川を眺めていた風景を再現するため、多摩川の土手に見立てた全長５２７mのコンコースを設けています。このコンコースは水族館２階のエントランスへと続いています。

● せせらぎで生きもの探し

水族館の３階には「多摩川エリア」を設けます。屋外では、アユなど多摩川に暮らす生きものを展示するほか、支流をイメージし、水中の生きものを探す体験ができるせせらぎも設けます。屋内にはカフェを併設します。カフェからはスタジアムが一望でき、球場一体型の水族館ならではの景色を楽しめます。



多摩川の水辺の様子を再現（イメージ）

● シンボルはアシカのオブジェ

スタジアムと水族館の一体性を象徴するのが、野球のボールを鼻先に乗せたアシカのオブジェ（高さ約５ｍ）です。スタジアムの様々な場所からも見えるように、屋外の「アシカの楽園」に設置します。



野球のボールを鼻先に乗せたアシカのオブジェ（イメージ）

スタジアムの大型ビジョンで水族館の生きものの様子をライブ放映するなど、両施設の一体性を活かした情報発信も行います。水族館を巡った後に野球観戦やスタジアムの散策を楽しんだり、野球観戦の後に水族館を訪れたりと、東京ジャイアンツタウンならではの多彩な楽しみ方を提供します。

３．飲食施設の名称は「Ｇ－ＴＯＷＮ　ＴＡＢＬＥ」

東京よみうり水族館と同時に、３階建て（延床面積３，２４９㎡）の飲食施設「Ｇ－ＴＯＷＮ　ＴＡＢＬＥ」も開業します。

水族館とは、都道をまたいで歩行者用ブリッジで直結するため、スタジアムと水族館、飲食施設が道路を渡らずに行き来できます。３施設の回遊性の高さが、東京ジャイアンツタウンの大きな特長です。Ｇ－ＴＯＷＮ　ＴＡＢＬＥのコンセプトは「アウトスタンド」です。心地よい風が通り、建物からは球場が望め、反対側には遠く広がる街並みを見渡せます。



水族館と同時開業の飲食施設は歩行者用ブリッジで直結（イメージ）

飲食施設の誕生によって、スポーツ観戦や水族館での体験、食事などを楽しみながら、東京ジャイアンツタウンでゆっくりと時間を過ごせるようになります。

Ｇ－ＴＯＷＮ　ＴＡＢＬＥは、スタジアムや水族館の来場者だけでなく、地域の方々も気軽に利用できる飲食施設です。１階にはベーカリーカフェなど、２階にはフードホールなど、３階には専門店を設け、屋上も一般に開放します。

■東京ジャイアンツタウンとは

読売新聞東京本社、読売巨人軍、よみうりランドの３社が東京都稲城市のよみうりランド遊園地に隣接する約７万６，０００㎡の敷地で、成長を意味する「ＧＲＯＷＩＮＧ」に「ＧＯＯＤ」を掛け合わせた「ＧＲＯＷＩＮＧＯＯＤ！」をコンセプトに「まちづくり」を進めています。周辺にはよみうりランド遊園地とポケパーク カントー、フラワーパークのＨＡＮＡ・ＢＩＹＯＲＩや温泉施設の花景の湯、東京よみうりカントリークラブなどがあり、読売グループが展開する、スポーツとエンターテインメントが融合したレジャーエリアとなります。

